

町内外の方に谷干城に関する感想やエピソードを語ってもらい、個々の「谷干城」像を皆さんに紹介していきます。

「谷干城」と私 林一將(見付)

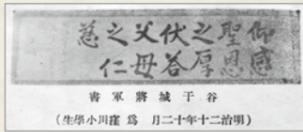


私は昭和一桁生まれである。当時の窪川小学校は北琴平町の高台にあり、見付からは呼坂にある忠霊殿公園に立つ「谷干城」銅像の前をとおる通学した。建設直後の銅像は堂々とした姿で、高さが約5mもあり、毎日これを見上げ「干城さん」に挨拶してから学校へ行く。



戦前にあった干城の銅像

そして、小学校の玄関に入ると干城が書いた扁額が掲げられていて、額に手を合わせてから教室に入ることが習慣だった。私は、親や校長先生に「大きくなったらなんになる?」と問われ「僕は、谷将軍のような偉いてなるぜヨ」と答えた思い出がある。



窪川小学校にあった干城の扁額(現在不明)

こうして少年時代は、常に「干城」に接し、尊敬の念を持って生活してきた。しかし、戦後は、毎日顔を合わせた銅像や扁額もなくなり、それが日常となった。

そして昭和40年代、私は保護司を拝命し、高知保護観察所の上野所長に仕えた。所長が窪川で出会った町民に「窪川は谷干城の出身地ですが、干城を知っていますか」と尋ねたが、

誰も名前すら知らないと嘆いていた。所長は「僕は熊本の出身。熊本では、西南戦争で熊本城を守った谷将軍は神様の存在。しかし、生誕地の窪川では名前すら知らない。窪川でも干城の顕彰運動を起こしてほしい」と私に依頼された。以来、郷土史家の先輩と共に資料を集め、干城の生涯を紹介し、史跡などを訪問する活動もした。

平成に入り「谷干城まつり」が事業化された。街頭パレードでは、当時の前田町長が軍人、私が政治家時代の干城を演じ、講談師の語りに合わせ大砲を撃ったり、突撃のパフォーマンスをしたりで好評を得た。この事業では干城の子孫の方も窪川に来ていただき、以来交流が深まるなど意義ある出会いとなった。以後、谷干城まつりは、スタイルを変え町民による街頭ミュージカルとして、観衆との一体の中で干城の偉業を披露している。



第1回谷干城街頭パレード

私は、上野所長の依頼を受け昭和40年代から谷干城の顕彰を続け、今では町を挙げて顕彰を行っている。これまでの活動で、郷土の偉人の功績を皆さんに知ってもらえれば、所長の要望に答えることができたかと思う。



高知市



別荘跡から高知市が一望

別荘跡(高知市三谷)

西久万の邸址から北山にある三谷集落(標高約200m)には、干城が晩年に通ったとされる別荘跡があります。現在は、別荘跡を紹介する看板があり、高知市から浦戸湾、太平洋へと望むことができます。

別荘跡を示す看板には、干城が地元の人々と親しく過ごしたこと、「三谷居士」の名でここから中央政界に意見を出したことが記されています。

谷干城の足あと

町内をはじめ全国には、谷干城の功績を称える史跡が残されています。この特集では、各地にある干城に関する史跡などを紹介し、干城を顕彰していきます。

谷干城邸址と墓所(高知市西久万)

四万十町には、干城生誕地の石碑がありますが、高知市には干城が晩年を過ごした邸址と墓所があります。邸址には、それを示す石柱と当時のまとも思われる土蔵が建っています。干城が暮らしていたころは、高知の街並みが一望できたようです。また、墓所は、邸址から3分ほど登った裏山にあります。墓石は生誕地と同様に自然石が使われていて、生前の夫婦仲を伝えるようにくま子婦人の墓と並んで建っています。



干城とくま子の墓

別荘跡を示す看板には、干城が地元の人々と親しく過ごしたこと、「三谷居士」の名でここから中央政界に意見を出したことが記されています。

四万十町が生んだ偉人

特集

谷干城

KANJO TANI



時代は土佐の山間より



平成30年(2018年)は、明治維新(1868年)から150年目にあたります。

四万十町通信では、幕末の志士・明治の元勳「谷干城」の生涯や史跡などを4回にわたり紹介して、郷土の偉人を顕彰していきます。なお、干城の正式な読みは「タテキ」ですが、干城が自ら好んだことや「谷干城ミュージカル」にならい、四万十町では「カンジョウ」と読んでいます。

谷干城の生涯

[第1回] 少年時代(1837~1846)

(著: 林一將)

1 干城の家系

干城の始祖は、「谷左近」と伝えられ、戦国期に大和国(奈良県)から土佐に入国し、長宗我部元親に仕えたと記録されています。その後「谷家」が世に知られるのは、百年後の子孫「谷秦山」で「土佐南学中興の祖」として有名です。秦山の学問は、社会的実践を重んじ、その教えは土佐藩の藩政改革にも活かされ、土佐勤王党の思想的基盤にもなりました。また、干城の生涯の指針になったといわれています。



干城の父・景井



3 貧しい少年時代
窪川での景井は、医業で生計を立てながら、近隣の人々に文武の教授をしていましたが、生活は大変苦しかったようです。少年干城は、垢とシラミにまみれた子どもだったようで、水浴びのときは「お前は汚いき、川下で泳げ」と言われたそうです。干城は、この時代を後年述懐して「自分は天保の飢饉の時に生まれ、又力の粥をすすって成長した。明治の今も地租税に苦しむ百姓町人には深い同情と理解がある」



本町にある生誕地石碑

2 干城の誕生

干城は、幕末の天保8年(1837)、父・景井、母・伊久の長男として窪川村本村(四万十町本町)で生まれました。母は、妹を生んだあと亡くなりました。以後、景井は「子を一人前にするまで娯楽を慎み、子どものために頑張る」と男手で二子の養育を決意し、再婚の勧めも聞かなかったそうです。

5 父の栄転、高知城下へ

干城が10歳の時、父・景井の学問の功績が認められ、土佐藩校への出仕の命を受け、住み慣れた窪川を去ることになりました。景井の医業や文武で世話になった郷の人々は、別れを惜しみ呼坂峠の茶屋まで干城一家を見送りました。干城も人々の見送りに感動し、城下へ向かったといわれています。



少年干城

4 自然の中で育つ

しかし、少年干城は貧しい境遇でも、冬は茂申山でチャンバラ、夏は吉見川で水浴びと遊びふけっしていたようです。そんな干城を父・景井は、注意もせず「遊べ遊べ、うんと太れ、おてんとう様の下でよい空気を吸うて…」と自然の中で自由に育てたといわれています。